



Title	法華経一仏乗思想に関する研究
Author(s)	苅谷, 定彦
Citation	大阪大学, 1982, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/33061
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	苅 谷 定 彦
学位の種類	文學博士
学位記番号	第 5526 号
学位授与の日付	昭和 57 年 2 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	法華經一仏乘思想に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 山口 恵照 (副査) 教授 日原 利国 教授 岸畑 豊

論文内容の要旨

本論文は、インド初期大乗經典たる法華經の主として前半部分について、文献学的考察を加えつつその所説内容を十分に把握し、そこに主張される一仏乘思想を解明し、それによって現行法華經には異質の一乘思想の存在することを指摘し、さらに一仏乘思想とインドの後代の大乗佛教との関連性を明らかにしたもので、序論二章、本論四章、結論から成っている。

序論 第一章 法華經思想解明の視点。初期大乗諸經典は、様々な信仰運動を興した人々が各自の獲得した信仰を告白し、大衆に伝道するために創作した一種の文芸作品である、とする近来の初期大乗佛教研究の成果にもとづき、法華經思想を解明するについて、本經を創作し唱導したある信奉者団（法華者団）を想定し、彼らが如何なる佛教の状況下にあって、何を追求し獲得したか、を究明するという視点に立つ。

第二章 法華經の問題意識と思想的立脚点。法華經序品第一の所説たる東方万八千の国土示現と日月燈明仏の過去譚を検討して、法華者団は仏滅後における三乗（声聞乘、独覺乘の小乗と大乗たる菩薩乘）の存在という現状を佛教の混乱、大・小乗の対立と捉え、これを解決する真の佛教とは何かという問題を提起し、その解答を自己の位置する「仏滅後」という歴史的時点に立脚して追求したことを見明らかにし、このような理解の妥当性を宿世因縁品第七の大通智勝仏の過去譚によって確認する。そこから、法華經の原初形態は一応序品から如來神力品に至る十數品で構成され、その中、方便品を中心とする前半部分は主として眞の佛教とは何かを明かし、法師品第十以下の後半部分は「仏滅後」を主題とするものと捉える。

本論 第一章 一仏乘思想の研究。法華團は、方便品においてまず仏智の不可言説なることを述べ、

これまでの仏の教説即ち三乗の教法はすべて仏の〈巧みな方法〉（方便）によって衆生の多様な志向に応じて説かれたものとし、さらに仏出の唯一目的は「ぼさつを教化すること」（ボーディサットヴァ・サマーダーパナ）であると述べて、自己の獲得した信仰を告白し、それを〈仏乗〉（ブッダ・ヤーナ）と標示し、「一乗」（エーカ・ヤーナ）であると規定し、さらに両者を合せて「唯一なる仏乗」（エーカム ブッダ・ヤーナム〈一仏乗〉）と呼び、これが大・小乗の対立を超える眞の仏教であるとする。ところで、現行法華經の仏出現の唯一目的を明かす文には後代の改竄が考えられ、梵文写本や漢訳等の諸異本を校合して、本文を「ぼさつを教化すること、即ち、仏智を衆生に示し、衆生をして仏智を理解せしめ、衆生をして仏智にめざめしめ、衆生をして仏智の道に入れしめること」と復元する。そこから「凡そいかなる衆生も皆悉く本来よりぼさつ即ち成仏可能者である」——これを「一切衆生皆悉ぼさつ」と標示する——が仏智であり、〈一仏乗〉の根本命題であることを導き出す。そして「一切衆生皆悉ぼさつ」なるが故に、「ぼさつを教化すること」は究極的には一切衆生を成仏せしめるものとして〈仏乗〉と標示されることが理解され、〈仏乗〉はいかなる衆生をもすべて悉く攝取する故に、必然的に「唯一の乗」即ち「一乗」たることが成立つとする。次に、仏智たる「一切衆生皆悉ぼさつ」を根底にして三乗と〈仏乗〉とはどのような関係にあるのか、又そこに介在するとされる〈巧みな方法〉とは何かを究明して、仏智からの三乗の展開と三乗の仏乗への統合という〈一仏乗〉の構造を明らかにする。即ち、仏智においては「一切衆生皆悉ぼさつ」でありながら、仏智の不可言説なることと衆生の志向の多様性の故に、直ちにそれを説示することは出来ず、そこに仏の〈巧みな方法〉によって、まず仏智にもとづく、多様なる衆生の志向に応じた三乗の説示、即ち仏智からの三乗の展開があり、その後に、仏出現の唯一目的は「ぼさつを教化すること」たる〈仏乗〉であるとして仏智の「一切衆生皆悉ぼさつ」なることが明かされることによって、声聞も〈仏乗〉のぼさつ、菩薩も〈仏乗〉のぼさつなりとして、三乗はすべて〈仏乗〉に統合され、〈仏乗〉は一乗なのである。そして、法華者団はこの〈一仏乗〉の構図の妥当性を三世十方諸仏の「常法」（ダルマター）と規定することによって主張していることを明らかにする。次に、〈一仏乗〉を開顯する方便品、さらには前半部分がすべて声聞を対告者とし、多く声聞乗について言及するのは、もとより声聞乗の〈仏乗〉への統合であるが、同時に菩薩乗をも〈仏乗〉に統合し〈仏乗〉を一乗化するために不可欠なる菩薩乗批判を意味し、法華者団の意図はそこにあると指摘する。さらに声聞について〈仏在世時〉と〈仏滅後〉とを区別することから、前半部分においても法華經の思想的立脚点は〈仏滅後〉にあることを明らかにする。次に末尾に存する大部の偈頌を綿密に検討して、〈一仏乗〉の構図を確証すると共に、法華者団はそれをインドにおける仏教の歴史的展開をふまえて構築していることを明らかにする。

第二章 一仏乗の顕揚。譬喻品第三以下の所説についてその一一を検討し、それらが前章で解明した〈一仏乗〉の構図に一致することを明らかにして、法華者団はそれら所説によって〈一仏乗〉の顕揚をめざしていることを論述する。即ち、譬喻品において声聞舍利弗の成仏宣言が仏陀の授記（成仏の資格証明）に先立つことは、〈一仏乗〉の根本命題が「一切衆生皆悉ぼさつ」であるとの証であり、三車火宅喻は特に菩薩乗と〈仏乗〉との区別を明確にして〈一仏乗〉の構図を説くものであり、信解品第四の長者窮子喻は、〈一仏乗〉の構図の中でも、仏智からの声聞乗の展開とそれの〈仏乗〉への

統合について、声聞の志向の劣小から高貴への過程を通して説くものである。又、舍利弗等になされる声聞授記は「一切衆生皆悉ぼさつ」から導かれる帰結であり、〈仏乗〉の声聞乗統合を明確にするものであるが、又一方、〈仏乗〉からの、声聞を不成仏とし小乗と貶称する大乗・菩薩乗に対する批判であり、〈仏乗〉と菩薩乗との相違を決定づけるものである。又、授記内容について検討し、そこから富樓那授記段の特異性を指摘する。さらに法師品第十の総授記や勸持品第十二の比丘尼授記、及びそこに示される女人成仏について論及する。

第三章 法華経における異質の一乗思想。現行法華経の前半部分に存しながら、前章までに取り上げなかった三草二木喻、壺の喻及び化城喻を検討し、それらの所説には〈一仏乗〉の構図に一致しない点のあることを指摘し、それらはすべて後に付加された異質の一乗思想であることを明らかにする。即ち、三乗と〈仏乗〉との関係を、三草二木と一味の雨との関係や、壺の種々相と粘土の同一性とのそれに譬える三草二木喻や壺の喻には、〈一仏乗〉の構図に不可欠なる〈巧みな方法〉が存しないのであり、一方、化城喻は、小乗たる声聞、独覚の二乗とその上に立つ大乗という構造になっており、〈巧みな方法〉によって説示されたものは声聞、独覚の二乗であるとするものである。そこから、〈一仏乗〉思想の解明のためには、これら二種の異質なるものを批判的に考慮する必要があるとする。

第四章 後代の大乗佛教における一乗説。〈一仏乗〉思想と後代の大乗佛教との関連性を究明するため、法華經論等に見られる法華經声聞授記解釈を検討し、それらは「一切衆生皆悉ぼさつ」を根本命題とする〈一仏乗〉思想とは異なる立場からなされていることを指摘し、次に、法華經の〈一仏乗〉思想を継承するとされる大乗經典における一乗思想を瞥見して、勝鬘經や大法鼓經のそれは化城喻の譬に、一方、薩遮尼乾子經のそれは三草二木喻の譬に近似することから、〈一仏乗〉思想の後代における展開の方向と、化城喻等の現行法華經付加の背景を窺う。

結論 以上のごとき〈一仏乗〉思想解明の成果を総括すると共に、この〈一仏乗〉は〈仏滅後〉における大・小乗の対立に対する真の佛教の提示であるが故に、仏陀は何故に滅したのか、〈仏滅後〉に残された法華者団は何をなすべきか等、要するに〈仏滅後〉の問題に対する答えが法華經には未だ残されているのであり、そこに法華經における法師品以下神力品に至る後半の部分の不可欠性が存することを明らかにする。

論文の審査結果の要旨

大乗經典の中でも代表的なものの一つとされる法華經についての研究は、資料として梵本が加えられてからだけでも龐大な量にのぼる。その中にあって、論者は、さらに一つの研究を加えようとするに際し、近来著しく進展した初期大乗佛教研究の成果にもとづいて、法華經の作者、即ち本經を創作し大衆に唱導したある一つの信奉者団の存在を想定し、これに「法華者団」という新名称を付した上で、法華經をもって、法華者団の奉じた信仰の告白書にして、しかもそれを広く一般大衆に唱導するための宗教的文芸作品と捉え、ここから、法華經そのものを通して彼らの信仰を解明しようとする。この

視点はまことに当然のものながら、これまで必ずしも十分に認識されていたとは言い難く、この点にまず本論文の独自の意義を認めることができる。

次に、この視点をこれまで殆んど不間に付されていた序品の検討に適用し、従来は単に放光の奇瑞とのみ解されてきた「東方八千の国土示現」をもって、法華者団の問題提起であるとし、「日月燈明仏の過去譚」からその解答として方便品以下の所説があるということを明らかにしたのは、論者の創見であり、序品の意義を十分に解明したものと言えよう。即ち、法華經は「〈仏滅後〉における眞の仏教とは何か」を明かすものであり、それ故に、〈仏滅後〉に置かれた法華者団の信仰そのものとする論者の主張は高く評価さるべきである。

この視点に立って、論者は方便品以下の前半部分の主題たる〈一仏乗〉思想の解明を試みるのであるが、それは従来、主として一乗と三乗との関係を究明することによってなされてきたのであり、しかも、三車家（三乗の中で声聞、独覺の二乗のみを方便即ち仮りのものであるとする説）と四車家（方便としての三乗の外に別に真実としての一乗があるとする説）と謂われる相反する二種の見解が出て、未だ決着を見るに至っていないものである。論者はその場合、従来の研究が経文から「一乗」等の関係する語を含む文を適宜に抽出して論ずるというものであった点に問題があるとし、経文全体を所説の順に詳細に検討し、その文意を十分にくみ取り、その上で〈仏乗〉とは何かを把握し、そこから仏乗と三乗との関係を明らかにすべきだとするのであって、これは極めて妥当なものである。そこで論者はまず方便品の所説を検討するのであるが、そこに示された経文の解読、文意の把握、さらに作者の意図の解明は、緻密で明確であり、その主張は説得力に富む。そして、現行法華經における、仏出現の唯一目的を明かす文には改竄のあることを指摘しているが、これは論者の新知見を示すものに他ならない。その本文復元をはかる論証の過程は首肯さるべきもので、復元された本文の確実性は極めて高い。

さらに、論者は、この本文から謂うところの仏智とは「いかなる衆生もすべて本来からぼさつである」を内容とするものであるとし、これを「一切衆生皆悉ぼさつ」と標示して、〈一仏乗〉の根本命題であるとする。そして「一切衆生皆悉ぼさつ」にもとづいて、仏出現の目的とされる「ぼさつを教化すること」の意味内容、それが〈仏乗〉と称される理由、さらにそれが「乗は唯だ一つ」即ち「一乗」である所以を明確に論証している。この「一切衆生皆悉ぼさつ」の提唱の意義は高く評価さるべきものである。次に、〈巧みな方法〉を軸として、「一切衆生皆悉ぼさつ」という仏智からの三乗の展開と、「ぼさつ教化」たる〈仏乗〉への三乗の攝取という〈一仏乗〉の構図を説くが、これは〈一仏乗〉思想の優れた解明であり、従来の一乗解釈をめぐる論争の解決に寄与するものと認められる。次に、論者は譬喻品以下の所説について綿密な検討を加え、〈一仏乗〉の構図の妥当性を明らかにすると共に、新知見を示している。例えば、長者窮子喻について、その意味内容を明確にすることによって従来の見解を糾し、声聞授記については、それが法華經に先行する大乗佛教に対する批判を意味すると指摘する。これは法華經をもって単に「声聞救濟經」と看做したり、あるいは安易な妥協主義、もしくは宥和主義のものとする従来の見解を退けるものであり、〈仏乗〉こそ眞の佛教であるとする法華者団の信仰を明確に捉えたものである。

さらに、論者が三草二木喻や化城喻について、それらの異質性を明らかにしたことは、一乗思想解釈に種々たる相違が生じた原因を明らかにした点で、その意義は洵に大きいものがある。

以上のごとく、本論文は「一切衆生皆悉ぼさつ」を〈一仏乗〉の根本命題とし、この命題のもとに法華經前半部分の所説を首尾一貫して明確に把握し、もって〈一仏乗〉思想を解明した点に優れた価値を有するものである。しかし、問題がないわけではない。「一切衆生皆悉ぼさつ」は、論者が、仏出現の唯一目的を明かす文から導き出したものであり、直接にそれを表わす文は法師品の冒頭に現われるものであることからして、論者の立てた仮説であるとも言える。けれども、この命題によって前半部分を首尾一貫して解釈しえているということは論者の仮説の有効性を示すものにほかならない。又〈仏滅後〉をもって法華經の思想的立脚点であり、〈仏乗〉は〈仏滅後〉における真の仏教であるとする論者の説は、〈仏滅後〉を主題とする後半部分を考慮して一層の詳論が望まれるところである。さらに、〈一仏乗〉思想と後代の大乗佛教との関連性の究明にも検討の不十分さが見られる。しかし、これらはすでに述べた卓抜な業績を損うものではなく、総合的にみて、本論文が文学博士の学位請求論文として十分な価値を有するものであると判定する次第である。